

東南アジア考古学会

TAIWAN 考古学セミナー・シリーズ《台湾考古学の新視点》

第3回：2022年12月17日（土）14:30-15:30（日本時間）

台湾北部における四、五千年前の農村社会 — 植物園遺跡下層を例として

郭 素秋

（中央研究院歴史語言研究所）

要旨

本研究では、台北市植物園遺跡下層（訊塘埔早期文化：5200～4200 BP）のフローティングにより得られた 101 点のサンプルに対する体系的な鑑定分析が進められ、各種の植物遺存体 67,165 個体が検出された。そのうち 90.39%は穀類であり、かつイネ（稲）類の遺存体が主体を占め、同時に少量のアワ（粟）が検出された。果実類の遺存数は全体として少なく、当時の植物資源の利用形態が主に穀物栽培であり、野生植物の採集に関し日常の食物に対する貢献度が低かったことを示している。

植物園遺跡の各発掘区で出土した植物遺存体の個体数と組み合わせを分析した結果、南海路発掘区で出土した植物遺存体は、国語実小（台北市国語実験国民小学）発掘区よりもはるかに豊富であることが明らかとなった。南海路発掘区の植物遺存体の組み合わせでは、イネ属の穂軸基部が圧倒的に多くを占め、アワの遺存体は主に未成熟か極めて未成熟な粒粒であり、概してこの地区が訊塘埔早期において農作物の加工活動に利用されていた可能性があることを示している。国語実小発掘区は、植物遺存体の検出数が少ないだけでなく、雑草が絶対的な優勢を占めているという特徴を示しており、集落全体でのその機能は、南海路区域の機能とは明らかに異なり、しかも集落の縁辺に位置していた可能性がある。

総じていえば、訊塘埔早期文化（台湾新石器時代前期、大坌坑時期とも称する）、植物遺跡、さらには台湾北部の先住民でさえ、イネとアワの混合による農業活動に主に従事していたはずであり、イネの移植（田植え）と利用の規模が一定の優勢を占めてはいるが、アワの重要性も無視できない。植物園遺跡から出土したイネ粒の粒形を測定し、他の遺跡と比較分析した結果、粒形は全体的に小さく、長幅比は2.2未満であり、台湾北部の大龍峒遺跡や台湾中部の安和遺跡、および中国大陸の長江中流域などから出土する初期型イネ粒の粒形の特徴と基本的に一致している。このように早稲（陸稲）との混合という作物の構造と小粒を主とするイネの特徴はすべて、台湾における初期農業の出現が、長江中流域から江西地域を経て福建地域へと達する伝播プロセスに関連している可能性が高いことを示している。

本論では、植物園遺跡の下層に残された農作物の分析と関連する遺物、空間分布などの検討を通して、次のことを最初に確認する。すなわち、台湾北部の新石器時代初期（訊塘埔早期文化）において、すでにイネとアワを並行栽培する農業が出現し、主要な収穫食物資源とする生業経済モデルとしていること、またそれは食用果実の採集と狩猟、漁撈などによって

補われ、さまざまな食料の栄養を補われていたということである。当時の人々は、すでにイネやアワの植え方を知っており、農民たちは、いつ作物を植え、灌漑し、雑草や害虫を取り除き、収穫し、種子を保存し、脱穀し、地力（土壌の肥沃さ）の維持といった、一連の作業体系と流れ全般を念頭に置いておく必要があった。季節変化に対する認識・把握も非常に正確であり、関連する儀式が発生した可能性がある。

この種のイネとアワを並行して栽培する農業形態（混作）は細分化と複雑化を伴い、採集や単純農業に比べてより安定して穀物を生産することができる。それは食糧として十分であるだけでなく、種子の保存や食糧生産のために備蓄する余剰穀物があり、植物園の村落が必要とする土器や石器などの物資を得るために、近隣の村との取引に使用されることさえあった。このような農業生活は、人々が植物園一帯に長く滞在するようにし、各空間の計画性と用途がますます明確になり、長期での居住に適したものへと徐々に発展していく。耕作、イネ・アワの脱穀、ゴミ処理、埋葬、年中行事・祭祀、公共空間など、さまざまなニーズを持つマイクロな空間規則は、明確な内部と外部の区分を備えた村落形態を形成し、隣接する河川での断続的な洪水を避け、予防し、処理のための適切な措置を講じることにもできる。また、機能や総則性に優れたさまざまな道具の発達は、衣食住や交通、教育、健康・娯楽、出産、老年、病気と死、快適さ、美しさ、さらには富を誇示するための肉体的および精神的なニーズを満たすことができる。

台湾北部最初期の新石器時代には、すでにイネとアワの共作による農村社会が見られた。この高度な農耕形態と長期にわたる定住により、中規模から大規模な農村社会の様相へと発展した。張光直や多くの学者たちが想像した「単純な農業」、「原始社会」は遠く過去のものとなった。台湾最初期の新石器時代は、台湾の原始社会から徐々に発展したのではなく、かなり初期の段階から村落の生活経済や遺物の製作技術、組み合わせ、装飾が発達していたことを説明している。

遺物と稲作の地域横断的な研究と理解の観点から、植物園遺跡下層のイネの源流は、長江中流域から江西地域を経由し福建地域へと到達した後、さらに福建から船に乗って台湾海峡を越え、淡水河に沿って台北盆地中央の植物園一帯へと到達した可能性がある。稲作は複雑な農業技術であるため、それを知っている少数の農民がイネやアワなどの種子を台湾に持ち込み、台湾の在地の人々に農業技術を教えて、長期的に安定した農村集落を開発していったことが推測される。

キーワード: 農村生活、イネ・アワ共作、大坌坑時期、訊塘埔早期文化、植物遺跡下層